

震災からの復興活動に取り組むリーダーを、
短期・中期・長期の3つのフェーズで支援します

震災復興リーダー支援プロジェクト

Support our Disaster Recovery Leaders - Relieve, rebuild and re-start Japan

経過報告レポート (2015.6.12-2015.9.11)



ピースジャム・佐藤賢さん

Contents

- P.1-4 リーダーインタビュー
- P.5-6 今季のトピックス
- P.7 プロジェクトの進捗
- P.7 ご支援ご寄付のお願い

1 リーダーインタビュー

気仙沼の市街地から10分ほど。中心部の賑わいが嘘かのような豊かな里山が広がる地区に、お母さんと子どもを中心に広がるピースフルな空間があります。

「育児」と「仕事」、そして「地域コミュニティ」——これまで分断されていたこれらの要素を融合した「新しい働き方」を生み出すのは、特定非営利活動法人ピースジャムです。現在、右腕となる人材を募集中のピースジャム理事長の佐藤賢さんに話を伺いました。

ーまず、ピースジャムがどのような活動をしているのか教えてください。

私たちは、「PEACE JAM」というジャム、「ベビーモスリン」という子育て用万能布の製造販売を通して、地域のお母さんの雇用支援を目的に事業を行っています。子育てと仕事を両立できる場をつくるために昨年9月にオープンした工房では、現在、妊娠中から乳幼児までのお母さん10名が働いています。ジャム工房と縫製加工場の間にあるキッズルームで子どもたちの姿を見ながら安心して仕事に取り組んでもらっています。

さらに、地域を巻き込んだマルシェなどの交流イベント、ベビーヨガやママ向けのワークショップも行なっています。こうした活動を通して、地域で子どもを見守りながら育てていく環境を生み出していくことが目的です。



ベビーモスリンの縫製をするお母さんと、棚で仕切られたキッズスペースで遊ぶ子どもたち。目の合う距離だから、子どももお母さんも安心です。

—このような事業を行なおうと思ったきっかけはなんで すか？

気仙沼出身の私は、震災前に地元に戻ってバーを営んでいました。そんななか起こったのが東日本大震災。津波により店舗を流出しました。さらに、当時私には、1歳に満たない娘がいたため、オムツやミルクが手に入らない状況に陥り困惑していました。また、同じ状況で不安を感じて困っているお母さんたちを目の当たりにしたんです。

そこで任意団体をつくって、子どもとお母さんのニーズをヒアリングしながら、物資の供給の支援活動を行っていました。

その活動をしていくなかで気付かされたことがありました。それは、お母さんになると、働きたくても働けなかったり、一人で家事育児に追われることになり、社会的に孤立してしまっているということ。外とのつながりがなくなり、孤独に陥ってしまっているのです。

これは震災前からもともと地域にあった課題が表面化しただけなんです。だったら、「育児と仕事の時間を共有する場」を作ろうと。たんに働く場所としてだけではなく、そこにいる人たちが支えあい、仲間となるような場。それが私たちの工房です。

—ジャムや縫製の「モノ作り」のための工房であるだけでなく、新しい「働き方」を実現するための工房でもあるということですね。

そうなんです。この工房が作っているのは、ジャムやベビーモスリンだけでなく、「工房の中で子育てしながら働く」という「新しい働き方」です。今まで、1つの場の中では交わることのなかった、育児と仕事の両立です。

そして、ここでの主役は、あくまで働くお母さんたちです。そのために私たちが考えているのは、効率ではなく、お母さんが働きやすい場をつくること。育児期のライフスタイルにあわせたフレキシブルな仕事の時間設定や、子どもを常に見ながら仕事ができるスペースを作りました。育児だけ、仕事だけ、ではなく2つを両立することで、お母さん同士の関係もより深いものになっています。仕事の支えあいはもちろん、育児の情報交換、不安や不満の共有まで、この場所がお母さんたちにとって貴重な場になっていることを実感します。

お互いを尊重し、仕事も育児も支えあうことで前向きに生きるお母さんたち。「ピースジャム」という団体名に込められた、「ジャムセッションのように一人ひとりがそのよさを最大限に生かして、すてきな空間をつくりあげていきたい」という思い。それを、お母さんたちが自然と実現してくれているんです。

—「工房の中で子育てしながら働く」という「新しい働き方」を実践しているお母さんの反応はいかがですか？

「母親としても成長できる場になっている」、「仕事仲間であり、ママ友でもある仲間ができるのがうれしい」という声や、子育てをしながら働ける場所があるということから、「安心して出産できます」という声もいただいています。そうした言葉を裏付けるかのように、ここはまさにベビーラッシュ。少子化なんて言葉が信じられないくらいです(笑)。

地方では人材不足が叫ばれていますが、そうした地域こそ、このような働きたいお母さんの雇用をすすめるべきだと思っています。フレキシブルな時間設定や、ちょっとしたスペースなど、環境さえ整えば、お母さんは大きな戦力になります。それは、企業が有能な人材を確保できることを意味します。さらに、「雇用」を通して地域づくりにもつながっていくと思います。まさに、ここでやっている「新しい働き方」をモデルとして、ほかの地方にも波及できるのではないかと考えています。



工房内は母親と子どもたちで常に賑わっています。9月にオープン予定の工房併設のカフェにて集合写真。
写真提供:ピースジャム

—新しい働き方のモデルは確立しつつあるように思えますが、現在の課題などはありますか？

ここで働きたいというお母さんがいても全員雇用できるかといったら、それはできない状況です。そのために、今ある商品をさらに磨き上げ、販路の拡大をしていくことが課題です。これまでは場所を借りての製造だったので安定的な生産ができませんでしたが、昨年工房がオープンしてからは、通年で製造が可能となり、売上規模も、工房オープン後の半年間で5倍に伸びました。今後も売上げを伸ばして、しっかりと利益を出し、一人でも多くのお母さんが集える場所を作っていきたいですね。

とくにベビーモスリンについては、国産の生地を使い、ハンドメイドで製法にもこだわった商品。品質のよさでもほかにはない強みを持っています。国内の百貨店などのほかに、海外への展開も始まっています。さらに販路を拡大していきたいです。



工房で生産されている地元の野菜や果実を加工した「PEACE JAM」6種類と、使い勝手の良さや柔らかい手触りが人気の子育て用万能布「ベビーモスリン」。

—より多くのお母さんにとっての社会的な寄り添いとなれるといいですね。団体としての今後の展望などはありますか？

今まで取り組んできた「仕事と育児の両立」ということに加え、さらに「地域コミュニティ」の要素を取り込んでいきたいと思っています。理想は、「地域住民が一体となって、子どもを育てていけるようなコミュニティ作り」です。

気仙沼は、2014年に過疎地域に認定された地域です。自然と核家族化し、独居老人の割合も多く、年代を超えた地域のコミュニティ構築が非常に困難になっています。それが、母親の子育ての負担増加にもつながっているのです。



多くの遊具が工房横のスペースに新設され、子どもたち、地域住民の憩いの場となっています。

だったら、年齢も立場も横断してみんなが集える場所をつくれればいい。そうした思いから、充実した遊具のある公園、秘密基地感覚で楽しめるツリーハウスなど、大人の自分たちでも思わず興奮できちゃうような施設を今年の8月にオープンしました。さらに、9月には工房内にカフェのオープンも控えています。これらの施設を拠点として、「育児」と「仕事」そして「地域コミュニティ」が交わり、横断的なコミュニティが作られていくことを夢見ています。そしてこの場所に、お母さんも子どもも、そして地域のお年寄りも、みんなの笑顔が生まれていくといいですね。



工房を見下ろせる高台には、「大人にも大人気」(佐藤さん)というツリーハウスも。

一商品販路拡大やコミュニティ形成など事業が多岐にわたるなかで、右腕の方に期待することはなんですか？

団体を運営していくにあたって必要な経営管理や、「PEACE JAM」や「ベビーモスリン」の商品開発、ブランディング、販促など右腕となっただけの方といっしょに取り組んでいきたいことはいっぱいあります。また、今後は地域コミュニティ形成のためのイベント企画などで団体間、企業間連携などもいっそうすすめていくことになると思います。そのときに、いかに住民を巻き込んでいけるか、を常に頭に入れながら計画実行していただきたいと思います。

ただ、そうした技術的なスキルというよりも、ここにいて母親や子どもたちや地域の人々と楽しくやっていきたいというマインドをいちばん大切にしたいと思います。ここに集う、子ども、親、スタッフ、そして地域の人とどんなシナジーが生まれるのか、ですね。

子どもや親、そして地域の成長を肌で感じながら仕事ができることはやりがいを感じられると思いますよ。

(書き手・写真：浅野拓也)



2 今季のトピックス（2015.6.12-2015.9.11）

■みちのく復興事業パートナーズ「事業ブラッシュアップ合宿」 （7月19日～20日）



震災から5年が経ち、今東北では復興文脈に頼らない産業づくりや地域の暮らしを支えるサービスを作っていくことが求められています。みちのく復興事業パートナーズ（注）は、これからの地域を支えていくことが期待される団体を対象とした事業ブラッシュアップ合宿を宮城県女川町で開催しました。合宿には宮城と福島から6団体が参加し、先進的な取り組みで実績がある専門家とのメンタリングを重ね、それぞれの事業のビジョンと戦略のブラッシュアップを行いました。参加したNPO法人Switch高橋由佳氏からは「5年目に入りスタッフも増えてきたなかで事業に対する考えを変えていかなければならないタイミングだった。メンターと議論を重ねる機会を持てたことで課題をあぶりだすことができ、解決策を考えられることができた」との声が聞かれました。



（注）みちのく復興事業パートナーズ：企業が連携し、被災地で復興に取り組むリーダーらを支援する枠組み。ETICが事務局を担い、いすゞ自動車、花王、ジェーシービー、損害保険ジャパン日本興亜、電通、東芝、ベネッセホールディングスが参画している（2015年9月現在）。

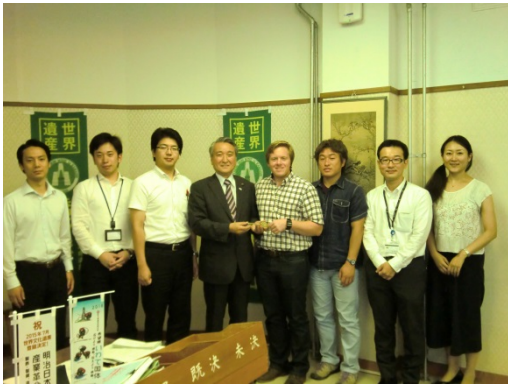
■みちのく仕掛け人市@東京 2015 SUMMER（7月25日）

今季初となる大規模マッチングイベントとして「みちのく仕掛け人市@東京2015 SUMMER」を開催しました。今回は新しい試みとして、右腕募集団体をテーマごとにわけて分科会形式でそれぞれの取り組みや、現在の東北の魅力を紹介してもらいました。例えば「地域資源を生かして、商品・サービスを生み出す！」という分科会では、宮城県女川町で東北の宮大工の技術をいかし釘を使わないギターの開発など、地域に新しい産業を立ち上げようとする女川ギター工房立ち上げプロジェクトにて、財務担当を担う右腕を募集しました。一方で「発想転換！課題解決の新しいモデル作り～福祉サービス、介護予防、障がい者雇用の実践者たち～」という分科会では、障がい者を戦力に人気のビュッフェレストランを運営する株式会社アップルファーム、介護予防の仕組みとして地域に健康体操を広げるNPO法人さんりくウェルネスなどが右腕を募集しました。

当日は、61名の方が参加し、参加者の中から既に右腕がマッチングし、活動を開始しています。今後の活躍が楽しみです。



■ 日米リーダー交流プログラム（8月20日～26日）



東京に集中しがちな「人材・資金・情報等の復興リソースをコーディネートする機能（＝ハブ機能）」を東北に強化することを目的に、ニューヨークにあるジャパン・ソサエティと共催し3年間のプログラムとして実施しています。

3年目のプログラムの第一弾として、8/20～26の期間、オハイオ州クリントン郡ウィルミントン市のEnergize Clinton Countyディレクターのテイラー・スタカート氏に来日いただき、東北各地で勉強会を行い、200名近い方々にご参加いただきました。同氏には1年目の訪米時にお会いし、2年目となる昨年10月にも来日いただいています。ウィルミントン市はタイム誌で「小さな良い町」と評価された人口約1万人の町でした。2008年、町の経済の中心を担っていた国際航空貨物大手DHL（本社、ドイツ）の撤退を機に、突如として郡全体の1/3の雇用を喪失し、経済危機に陥っています。この危機からまちの再生に取り組もうと立ち上がったのが、テイラー氏ら地元出身の若者たちでした。最初に手掛けたのが“バイローカルキャンペーン”。地元のビジネスで購買した時に地元資本以外のビジネスの時よりも経済効果が大きく、ある研究結果では100ドルを地元のビジネスで使うと68ドル地元へ還元するものの、大手チェーンなどに使った場合は43ドルだけが地元へ還元されるというものでした。

そのほかにも、Local Business、Food、Energy、Visioning、Peopleという5つのLocalに基づき、地域のしなやかな回復力を高められています。

■ Local & Social Startup Week（8月31日～9月3日）

8月31日より、7名の右腕募集中のリーダーをゲストに、「"地方創生"のリアル～東北ではじめる"地域の仕事のつくり方"～」をテーマに、3日間の連続イベントを開催しました。各日程でのタイトルは、

Day1（8/31）：地域から1億円企業を育てる。ローカルベンチャー論。

Day2（9/2）：福島から未来の社会を考える。社会実験論。

Day3（9/3）：社会的弱者がまちの新たな主人公に。福祉型まちづくり論。

家業や中小企業の改革、Iターン起業、農家のイノベーション、事業を作る住民自治、社会的弱者を主役にしたまちづくりなど、多様なテーマでチャレンジの生まれている東北に、「右腕」として関わる魅力を発信するイベントとなりました。3日間のイベントに、合計74名が参加しました。



3 プロジェクトの進捗

2015年9月11日の時点で、119のプロジェクトに215名の右腕人材が参画してまいりました。参画期間（1年間）が終了した右腕人材（社会人に限定）の約60%が継続して被災地に残り、そのうち15名は自ら起業するなど、彼らは被災地での重要な役割を担いつつあります。現役（参画期間中）の右腕とあわせると、現在120名の人材が、東北の担い手として活動を行っています。

2013年に新たに設定した、「5年で300名」の参画に向け、今後も精度の高いマッチングと各種サポートを行ってまいります。



4 ご支援・ご寄付のお願い

本プロジェクトについては、スタート以来、国内外の個人・団体・企業の皆様より大きな関心を頂戴し、現在のご寄付・助成金等の総額は、入金見込額も含めて、757,694,601円という多額のご支援をいただいております。この場をお借りしまして、改めて心より感謝申し上げます。本プロジェクトは、当初、2013年度末までの3年間を目安に取り組んでおりました。しかし、東北の復興が本格化していく中で、中核事業である右腕プログラムへのニーズは、更に高まってきており、2015年度末までの中長期計画を策定しました。

右腕参画は初期に設定した目標から、「5年で300名」へと上方修正しております。目標の変更に伴い、残り4千万円ほどの資金調達に向けて、改めて資金調達戦略の強化を実施してまいります。皆様におかれましては、「震災復興リーダー支援基金」のPRへのお力添えははじめとして、事業連携や各プロジェクトへの個別のご協力など賜りますよう、引き続きよろしくお願い申し上げます。

>>寄付ページURL http://www.etic.or.jp/recoveryleaders/donations_support/please_donate

《ご寄付の受付》

■信頼資本財団「震災復興リーダー基金」

<http://www.shinrai.or.jp/fukkou-shien/etic2/>

※公益財団法人である信頼資本財団は、特定公益増進法人に該当するため、寄付者の税は確定申告をすることによって寄付金控除の優遇措置を受けることができます。

■Global Giving

<http://www.globalgiving.org/projects/sponsor-fellows-for-tohoku-and-japans-recovery/>

※米国在住の方は、GlobalGivingから寄付していただくと、税控除を受けることができます。

■American Express（メンバーシップ・リワード）

http://catalogue.membershiprewards.jp/viewAwardDetail.mtw?productId=4487681&categoryName=jp_21a_charity_tohoku

※アメリカン・エキスプレスのカード会員さまは、ポイントによる寄附ができます。

連絡先・お問い合わせ先

◆NPO法人ETIC.内 震災復興リーダー支援プロジェクト 事務局（担当：山内・押切）

東京都渋谷区神南1-5-7 APPLE OHMIビル4階

mail : fukkou@etic.or.jp Web : <http://www.etic.or.jp/recoveryleaders/index.html>